

相互評価システムを利用したプレゼンテーション演習

竹田 尚彦[†] 吉田 宏史[†]

愛知教育大学 情報教育講座[†] 愛知教育大学大学院[†]

1. はじめに

大学の学修において学生が身につけておくべき技能には、情報リテラシーや英会話能力がある。なかでも筆者が特に重要だと考えているのは、文章作成能力(作文能力)と発表能力(プレゼンテーション能力)である。本学の情報教育課程では、平成 12 年のカリキュラム改訂に伴い作文能力と発表能力を涵養するため、それぞれ「レポートライティング」と「プレゼンテーション技法」という科目を 1 年生の必修科目として導入した。ここでは「(借り物ではない)自分の考えを他人に如何に伝達するか」という視点に立ち教育を行っている。

「プレゼンテーション技法」では、通常行われているように「スライドを準備し発表と質疑応答」をするという一連の流れで教育を行っている。その後、教師によるレビューを経て、発表の改善を試みさせる。しかし、この方法では教師の指摘が一面的になったり説得力を持たなかったりすることが間々ある。

学生の発表が、聴衆つまり他の学生に対してどのような印象を与え、どのような情報伝達がなされたかをフィードバックし、発表の改善の糧なるようにするとよい。そのため、学生同士が相互にチェックしあう相互評価を実習に取り入れることが多い。この評価は発表直後に即座に発表者に示されると、より効果的に発表の改善に資すると考えられる。そこで筆者らの研究グループでは、相互評価システムを教科「情報」の実習のために開発した[1]。これは実習で作成された成果物を生徒同士で評価しあうとともに教師の指摘やコメントを入れられるようにしたものである。

本稿では「プレゼンテーション技法」指導の基本的な考え方と実施方法について述べた後、相互評価システムを用いて授業実践を行なった結果について述べる。

2. 授業の概要

「プレゼンテーション技法」は、1 年生後期に実施する口頭発表演習を中心にした必修科目である。これは前期に開講される「レポートライティング」と対になっており、どちらもサイクル制と呼ぶ授業方式をとっている。

2.1 教授法の基本思想

作文も口頭発表も換言すれば、自分の考えをどのように相手に伝えるかというコミュニケーション能力の養成することに他ならない。そこで筆者は、次のような方針を立てて授業に臨んでいる。

- 1) なるべく身近な題材をテーマにする
- 2) 定型パターンで指導しない
- 3) スモールステップで徐々に身につける
- 4) 実習後、必ず作品を改善させる

身近なものを題材にする理由は、学生が考えの及ばない難しい問題を取り上げると、インターネットから情報収集したものを無批判取り入れる傾向があるからである。これでは、自分の考えを表現したことにはならず教育効果が薄い。また、同様な理由で、レポートや発表の定型パターンをあえて教えないようにしている。

2.2 サイクル制

スモールステップで教育するために、サイクル制をとっている。「レポートライティング」と「プレゼンテーション技法」の各サイクルのテーマを表 1 に示す。

どちらの授業も 4 サイクルで構成しており、作文の場合は、Cycle 1 で、一文または二文に注目して明解な文を書けるように指導する。その際、パラグラフや文章全体の不具合には言及しない。次の Cycle 2 では、文と文の論理的な繋がりを重視し、論理の飛躍や矛盾に言及する。サイクルを追う毎に、広い範囲で文章を見渡すような構成をとっている。発表の場合は、一枚のスライドから始めて、徐々に全体を見通すような構成にしているが、作文のと完全に対応しているわけではない。

表 1・サイクル制

Cycle	レポートライティング	プレゼンテーション技法
1	明解な文を書く	見やすいスライド
2	文と文のつながり	スライドの構成
3	パラグラフの構成	効果的なプレゼンテーション
4	文章の構成	最終発表(自由課題)

2.3 サイクルの授業進行

1 サイクルは授業 3~4 回に対応しており、次のようなステップで授業を進めていく。

[Step 1: 解説] PowerPoint を使ったスライドの作成方法や基本技能を解説する。

[Step 2: 制作] 与えられた課題に基づき発表用スライド(および口頭発表用原稿)を作成する。

[†]A Presentation Practice: Using The Peer Review System
Naohiko Takeda, Hiroshi Yoshida (Aichi University of Education)

[Step 3: レビュー]口頭発表を行い、内容についての議論をするとともに、発表での問題点や改善点を指摘する。

[Step 4: 最終版作成]レビューでの議論や指摘に基づき改善された発表用スライド等を提出する。

3. 相互評価システムを用いたレビュー

本節では、Cycle 1 で行ったレビューについて述べる。このサイクルの発表テーマは、「It's My Fun!」で、自己紹介代わりに現在のめり込んでいるものについて発表する。

3.1 レビューの実施

相互評価システムは、前述の[Step 3: レビュー]時に使用する。相互評価システムの機能面については、文献[1]に詳しいので、そちらを参照していただきたい。

レビューでは、1人5分程度の発表を行い、その後、発表者自身に司会進行をさせ、3分間の質疑応答を行う。この間、聞いていた学生は質問をするとともに、相互評価システムで発表者に対する評価と意見等を記入する。この時、教師が発表の良し悪しやウィークポイントに対して、コメントを入れると影響を受けるので、相互評価終了後にまとめてコメントするように心がけた。

3.2 相互評価用フォーム

筆者は次のような評価用フォームを用意した。

- ・ 5点満点評価項目
 - 「スライドの配色・デザイン」「スライドの文字の読みやすさ」「話し方」「内容に対する興味」「内容の理解」の5項目。
- ・ 自由記述評価項目
 - 「発表の良い点」「発表の悪い点」の2項目。

3.3 相互評価の記入例

評価が入力されると、図1のような評価結果一覧が表示される。レーダーチャートは、5点満点評価項目の得点平均を示している。この例では「発表・スライドのデザイン・話し方ともに良かったが、ややスライドの文字が見づかった」ことが分る。下段は、評価者ごとの自由記述コメントの一覧表である。最上段は、これらの結果を見て、発表者自身がコメントしたものである。

なお、これらの評価結果は、発表者自身のものだけでなく、他の発表者のものも閲覧することができる。したがって、どういう発表をすると、どういう評価を受けるかを知ることができる。また、他人のコメントを参照できるので、どのようなコメントが適切か他人のものと比較ができるなどの効果がある。

しかし、一方で分の評価を他人知られたくなかったり、記入者名が明らかになるので、人の結果にコメントしづらかったりする場合もある。こうした場合は教育的配慮から、他人の評価を見られないようにしたり、評価者名を匿名にしたりするように設定できる。今回の実習では、評価者名は匿名、評価結果は参照可能な設定にした。



図1 評価結果の表示

4. 試用結果

図2は、レビュー後のアンケート結果である。相互評価によって、他人の発表をしっかりと聞くようになり、その評価が今後のプレゼンテーション作成に役立ちそうであることが読み取れる。また、批判的な評価であっても、評価が納得できる者が多く、教師の評価はあまり期待されていないことが分る。しかし、一方で、「評価が修正の役に立つ」と答える者が少なく「次の発表ではうまくやるが、今回のものは修正したくない」傾向が認められる。また、副次的な効果として、評価があるために質疑応答が活発になったことが認められた。

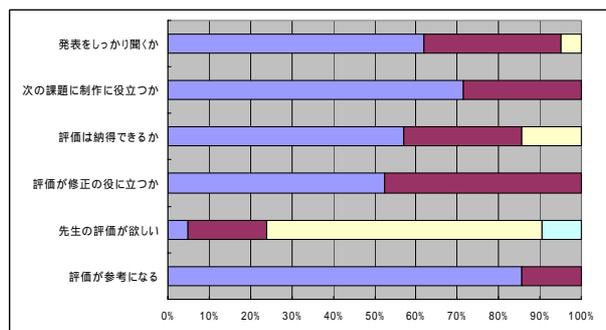


図2 相互評価後のアンケート調査結果(抜粋)

5. まとめ

「プレゼンテーション技法」の口頭発表演習に相互評価システムを導入したところ、即時に評価結果がフィードバックできるため教育的な効果が上がりそうであることが分かった。授業終了後、4サイクル分の評価結果を詳細に検討して、その効果を確かめる予定である。

【参考文献】

- [1]吉田宏史, 高橋岳之, 竹田尚彦: 自由記述を重視した成果物相互評価システム, IPSJ 情報教育シンポジウム SSS2004, p.p.159-162, 2004.